



イギリス大衆紙『デイリー・メール』の創刊号から2004年までの記事を原紙のイメージを忠実に再現し、フルテキスト検索

The Ideal Home Exhibition

Olympia, London W
Friday, October 31st to
Saturday, October 24th, 1914

The Ideal Home Exhibition is a unique and one of a kind... It will afford a knowledge of the most improved appliances and conveniences of domestic science and all the other things that will tend to the enrichment and raising of life, in the beauty and cheer of homes. It is indeed the highest attainment in art, art in science, in a word, "The Ideal Home" is its object.

NO EQUAL IN ALL THE WORLD, and are absolutely the CHEAPEST PROGRAM BICYCLE ON THE MARKET. DELIVERED TO £7-7-0

WHITELEY'S WAREHOUSING REMOVALS LARGEST & SAFEST WAREHOUSES ESTIMATES FREE

NEWBURY'S Bargain Book



PRIME MINISTER MAGGIE!

It's history—a woman takes over No 10

Huge defeat for Jeremy Thorpe

LADY SARAH WILSON.



THE TRAGEDY OF THE SHELLS.

LORD KITCHENER'S GRAVE ERROR.

The process of forming the new Cabinet went on smoothly enough yesterday, with a great deal of push on the part of some and much self-sacrifice on the

Daily Mail Historical Archive

1896-2004

Daily Mail Historical Archive

1896
2004

本データベースはイギリスの新聞『デイリー・メール』の創刊号から2004年までの記事を電子化、原紙のイメージを忠実に再現し、フルテキスト検索を実現しました。本紙に加え、戦間期の1923年から1931年まで大西洋の定期船に乗船する富裕層向けに船内で印刷発行され、現在完全な形で入手するのが極めて困難である『大西洋版 (Atlantic Edition)』も収録されています。

『デイリー・メール』小史

19世紀後半のイギリスでは選挙権や初等教育機会の拡大と都市化の進展により、政治参加と社会的上昇の機会が与えられた大衆が新たな社会階層(下層中流階層)を形成しつつありました。しかし、これらの社会階層の関心に応える新聞は存在していませんでした。『ザ・タイムズ』に代表される既存の日刊紙は社会のエリート層向けのもので、大衆にとっては読みにくく、疎遠な存在でした。新しい新聞の登場が待たれていたのです。

この時代の空気を読み取ったのがアルフレッド・ハームズワース(後のノースクリフ卿)。すでに雑誌の世界で新しい試みを展開していたハームズワースは日刊紙市場に参入、「忙しい人のための新聞」と銘打って、1896年『デイリー・メール』を創刊します。知識や教養のない読者も読める平易で読みやすい新聞という新しい新聞像を打ち立て、政治欄と社説あってこその日刊紙という通念にはおおかまいなく、大衆が関心を持つコンテンツを提供しました。また領土獲得を巡って列強各国が角逐する帝国主義の時代において、政治家が推進する帝国主義的な政策に大衆が加担するという現代的な政治状況が生まれる中で、『デイリー・メール』は排外的な世論を追い風に危機を煽り、戦争が起こる度に発行部数を伸ばし、『ザ・タイムズ』の発行部数が数万部程度に過ぎなかった時代に、一時は100万部を超えるほどのイギリス最大の新聞に登りつめます。

第一次大戦は『デイリー・メール』の影響が大きく発揮された時期です。後に「第一次大戦を予言した新聞」と言われるほど、戦前からドイツの脅威を煽り、ドイツを上回る戦艦の建造を主張した『デイリー・メール』は、戦争が勃発すると、戦意を発揚するためのキャンペーンを展開します。社主義者から戦地に赴き、戦況を報告する記事を掲載、また軍の公式の新聞の地位を得て前線に新聞を届け、前線からは兵士の書簡を集め、兵士をニュースソースとして使うという画期的な手法を用いて、前線と銃後の一体感を演出します。さらに、クリミア戦争の時に『ザ・タイムズ』が軍の杜撰な作戦を暴き政権を崩壊に追い込んだメディアと政治の攻防劇を再演するかのように、砲弾問題を巡って政権批判を展開、アスキス内閣に退陣を促します。後任のロイド＝ジョージ内閣では社主のノースクリフ卿がプロパガンダ指揮官に就任、『デイリー・エクスプレス』社主ビーヴァーブルック卿の情報大臣就任とともに、新聞王が政権に参画する時代の到来を告げます。

日刊紙は男性が読むものとされていた時代において、『デイリー・メール』は創刊以来、女性の読者を意識した紙面作りを展開しました。とはいえ、『デイリー・メール』が念頭に置いていたのは進歩的な女性ではなく、家庭を守る伝統的な価値観を持った女性です。これらの女性読者向けに女性ライターを起用し、住居、料理、裁縫の記事を掲載する一方で、女性参政権獲得のために闘う進歩的な女性に対しては批判的な眼差しを注ぎました。

ノースクリフ卿の死後、弟のハロルド(ロザミア卿)の時代に『デイリー・メール』の政治的スタンスは大きく右方向に旋回します。ムッソリーニやヒトラーらのファシズムを支持し、彼らへの独占インタビューを行なう一方で、新生ソ連をバックに左派勢力が台頭する中、ソ連とイギリス国内の左派勢力の結託を示すジノヴィエフ書簡(偽造説が有力)を総選挙の最中に暴露し、政権を獲得したばかりの労働党を敗北に追い込みます。しかしこの政治スタンスも、第二次大戦でイギリスがファシズム陣営と戦う状況の中では後退せざるをえず、ファシズムを支持した過去は後々まで尾を引き、しばらく低迷の時代を迎えます。加えて戦後には、揺籠から墓場までの福祉国家の時代が到来、家族と伝統の価値を重視し社会福祉の拡充に批判的な『デイリー・メール』の影は一層薄くならざるを得ません。

しかし、経済が減速し福祉国家体制に対する批判が一定の政治勢力になる1970年代、低迷が続いた『デイリー・メール』に復活の兆しが見え始めます。復活の立役者になったのがデイヴィッド・イングリッシュ編集長。イングリッシュ編集長の下、『デイリー・メール』は「ミドル・イングランド」のスローガンを掲げ、女性向け記事を拡充するなど、創刊の原点に戻って紙面を刷新します。またマーガレット・サッチャーを見出し、積極的にコミットし始めるのも同じ頃です。1975年の保守党党首選では下馬評の低かったサッチャーを支持、以後、保守党党首から首相時代までサッチャーを全面的に支援します。庶民の家に生まれ、保守的な価値観を持ち、労働党や労働組合に敵対的で、女性であるサッチャーは、『デイリー・メール』にとってその価値観を完璧に体現した政治家でした。

イングリッシュの後任として編集長に就任したポール・デイカーの時代には、冷戦後の新しい国際情勢の下、国民のテロリズムに対する不安と欧州連合に対する懐疑的心情を捉え、EU残留か離脱かが争われた2016年の国民投票では離脱を支持、離脱派優勢に向けた世論形成に大きな影響を及ぼしました。

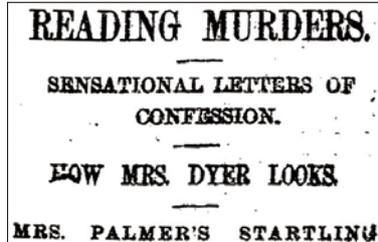
現在『デイリー・メール』は、イギリスの新聞の中では大衆紙『サン』に次ぐ発行部数を維持しています。オンライン版の『メール・オンライン』はイギリスで最もアクセス数の多いニュースサイトとして人気を博し、インターネットの時代において新聞各紙が苦境に陥る中、オンライン版の収益が経営を支える構造を維持しています。『デイリー・メール』はこれまで研究資料としては『ザ・タイムズ』等の陰に隠れ、軽視されてきました。しかしイギリスのメディアと社会に大きな影響を及ぼしてきたその歴史を考えれば、この軽視は不当なものであったと言わざるを得ません。現実政治においてポピュリズムが先進諸国を席卷し、学問の世界では社会史以降、普通の人々の営みが考察されるようになった今、『デイリー・メール』の歴史は現代社会を読み解くうえで大きな手掛かりを与えてくれるでしょう。

1896-1915

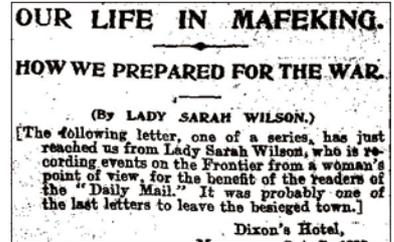
- ◆ 1896 『デイリー・メール』(DM) 創刊 — 1
- ◆ 1896 アメリカ・ダイアー事件 — 2
- ◆ 1899 南アフリカ戦争 — 3
- ◆ 1903 女性社会政治連合創設 — 4
- ◆ 1908 「理想の住まい」展始まる (DM) — 5
- ◆ 1909 キャブマン救済キャンペーン (DM) — 6
- ◆ 1909 ドイツの新型戦艦建造計画 — 7
- ◆ 1911 黒パン消費奨励キャンペーン (DM) — 8
- ◆ 1914 第一次大戦勃発 — 9
- ◆ 1914 白い羽運動 — 10
- ◆ 1915 メディアで"shell shock"の言葉が使われ始める — 11
- ◆ 1915 砲弾問題でキッチナー陸軍大臣を批判 (DM) — 12



1 従来の日刊紙と差別化しようと創刊号から "Daily Magazine" というニュース以外の記事だけを掲載する欄を設け、読んで面白い新聞作りを目指した。(May 4, 1896)



2 一般読者が興味をもつ話題の定番は殺人事件。『デイリー・メール』は創刊の年に発生した連続幼児殺人事件を生々しく伝えた。(May 4, 1896)



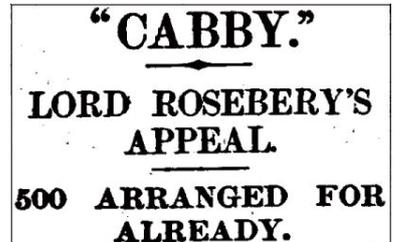
3 創刊3年後に勃発した南アフリカ戦争では従軍記者を戦地に送り込み戦況を伝えた。記事は史上最初の女性従軍記者サラ・ウィルソンによるボーア軍に包囲されたマフェキングの報告。(November 3, 1899)



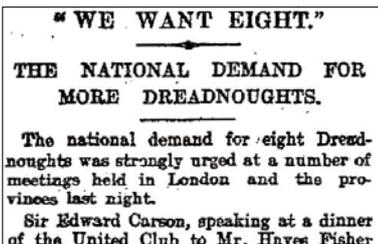
4 パンクハースト率いる女性たちが参政権を求めて下院へ突入した時は動物園に例えて取り上げた。「サフラジェット」は直接行動に訴える女性への侮蔑語として『デイリー・メール』が初めて使った。(October 24, 1906)



5 女性読者を増やすプロモーションの一環として、女性の自己表現の手段であった室内装飾をパッケージとして提供する「理想の住まい」展を始めた。(August 20, 1908)



6 自動車の登場によって仕事を奪われつつあったキャブマン(辻馬車の御者)の生活支援と自動車運転技能習得支援のために寄付を募った。(April 24, 1909)



7 ドイツのドレッドノート型戦艦に怯える世論を前に、“We want eight, and we won't wait” (絶対に8隻、待つ余裕なし)のスローガンで、ドイツに対抗できる建造計画の推進を後押しした。(May 18, 1909)



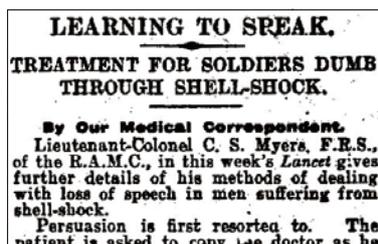
8 『デイリー・メール』は論争を喚起するために様々なキャンペーンを行なった。記事は黒パンの消費を奨励するキャンペーン。(February 10, 1911)



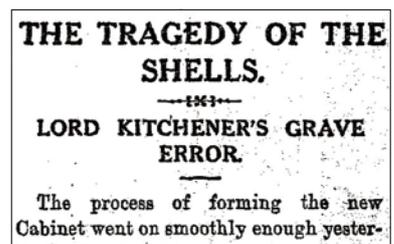
9 「ドイツは大英帝国の破壊を準備している」とドイツの脅威を煽動する記事を大戦勃発5年前に掲載。連載記事はパンフレットとして再刊されると160万部のベストセラーになった。(December 13, 1909)



10 戦争が始まると男性に白い羽を渡して戦地に赴くよう促す運動が女性の間で起こった。白い羽はアルフレッド・メイソンの小説に由来し、臆病者を意味した。(August 31, 1914)



11 前線の極限的な状況の中で多くの兵士が"shell shock" (神経症) を患った。『デイリー・メール』は戦争が生んだ精神障害を頻繁に取り上げた。(September 9, 1916)



12 無用の砲弾のせいで兵士を死に追いやっているキッチナー陸相を社主義者から社説で批判。戦争最中の陸相批判は反発を買い部数減少を招くも、アスキス政権崩壊の一因となった。(May 21, 1915)

1916-1928

- ◆ 1916 イギリスで徴兵制導入される — 1
- ◆ 1916 ヴェルダンでの戦い — 2
- ◆ 1916 アスキス内閣総辞職、ロイド=ジョージ内閣成立 — 3
- ◆ 1918 ノースクリフ卿、対敵国プロパガンダ指揮官に就任 — 4
- ◆ 1918 ピール夫人の料理コラム (DM) — 5
- ◆ 1918 第一次大戦休戦
- ◆ 1918 イギリス総選挙 — 6
- ◆ 1919 パリ講和会議 — 7
- ◆ 1922 ノースクリフ卿死去、弟のハロルドが DM の社主に (DM)
- ◆ 1922 ムッソリーニ、イタリア首相に就任 — 8
- ◆ 1924 イギリス総選挙の最中に DM、ジノヴィエフ書簡を掲載 — 9
- ◆ 1926 イギリスでゼネスト — 10
- ◆ 1928 イギリスで 21 歳以上の女性に参政権が与えられる — 11

BURNING "THE DAILY MAIL."
SOME OF THE REASONS.
The Daily Mail continues to be burned throughout the country and is likely to be still further distinguished in that manner in the near future. The first of

1 イギリスでは伝統的に徴兵制に対する抵抗感が強く、人々は徴兵制の必要を説く『デイリー・メール』を燃やし抗議の意思表示をした。記事は徴兵制反対を3つに類型化し分析している。(May 31, 1915)

THE LIMPETS.
A NATIONAL DANGER.
A moment in our struggle for existence has now been reached when government by the 23 men who can never make up their minds has become a danger to the Empire.

3 アスキス内閣総辞職直前の社説。迅速な決断が求められる戦時において何も決められない閣僚たちを地位にしがみつく者を意味する "limpet" と呼び、彼らこそ国難であると断じた。(December 2, 1916)

A VERY BAD BARGAIN.
We submit that when a Scotsman and a Welshman meet to discuss a difficult business bargain a particular result is probable. But when two Scotsmen tackle a Welshman the result is a foregone conclusion.
Less than a moon ago our Prime Minister had the political world at his

6 休戦直後の総選挙では対独政策が争点の一つになった。『デイリー・メール』は懲罰的な賠償金請求やドイツ皇帝の訴追など対独強硬政策の遂行を社説で説いた。(December 2 1918)

MOSCOW ORDERS TO OUR REDS.
GREAT PLOT DISCLOSED YESTERDAY.
"PARALYSE THE ARMY AND NAVY"

9 イギリス軍の無力化と労働党による対ソ連借款協定を内容とするコンメンタル議長ジノヴィエフがイギリス共産党に宛てたとされる書簡を掲載、総選挙での労働党敗北に追い込んだ。(October 25, 1924)

LORD NORTHCLIFFE ON THE BATTLEFIELD OF VERDUN.
GERMAN LOSSES 100,000.
WHY THEIR GREAT ATTACK FAILED.
FRENCH ARMY FOREWARNED.
INSTRUCTIVE RESULTS OF A VISIT TO THE ARMY IN THE FIELD.
 By LORD NORTHCLIFFE.

2 ノースクリフ卿は激戦の地フランスのヴェルダンに自ら趣き、同行した『ザ・タイムズ』外国特派員ウィッカムの協力を得ながら、長文の記事を書き上げた。(March 6, 1916)

THE NORTHCLIFFE PRESS.
END OF THE DEBATE.
MR. CHAMBERLAIN said he had listened with unfeigned satisfaction to Mr. Lloyd George's statement. The Press attacks on distinguished generals and admirals were not only deplorable in themselves—they were cowardly. The men who made them acted not only contrary to policy in war time but also in a way gentlemen did not act at any time. The functions of the Press were not the functions of the Government and the functions of the Government.

4 ノースクリフ卿やビーヴァーブルック卿ら大新聞の社主が政府の重要ポストに就任し影響を及ぼしていることを懸念する議会の発言を紹介。(February 20 1918)

THE PREMIER ON HIS PLEDGES.
"ALL IN THE SECRET TERMS."
SPEECH IN THE HOUSE.
VIOLENT ATTACK ON THE NORTHCLIFFE PRESS.

7 講和会議がパリで始まることとノースクリフ卿は交渉内容を入力し交渉過程に介入しようとした。たまりかねた首相が議会でノースクリフ卿の「病的な虚栄心」を非難した。(April 17 1919)

FOR KING AND COUNTRY!
The miners, after weeks of negotiation, have declined the proposals made

10 炭坑労働者に端を発するゼネストを国に災いを齎す一歩指導者の扇動による革命運動であると断じ、法の遵守と国王への忠誠を呼びかけた。(May 3, 1926)

FOOD CHAT.
A MEATLESS MENU.
 By MRS. C. S. PEEL.
MENU.—Oyster turnovers. Poached eggs in potatoes; peascale. Apple maise pudding.
At the present time oysters are cheap; but served plain they need an accompaniment of brown bread and butter, and butter cannot always be spared for the purpose. Served hot in turnovers they are delicious and filling.

5 食糧難の戦時中に人気を博した料理コラム。著者のピール夫人はノースクリフ卿の信頼が厚かった看板記者の一人で当代一のカリスマ主婦。(February 28 1918)

THE SAVIOURS OF ITALY.
The rescue of Italy from the Bolsheviks by the unselfish devotion of the Fascisti is not only a romance in itself; it is also one of the most important events of our time. For that reason the

8 「ファシストの無私の献身によりポリシェヴィキからイタリアを救済したことは現代の最も重要な出来事である」と、ムッソリーニの首相就任を高く評価。(December 19, 1922)

VOTES FOR "FLAPPERS."
By the end of this week the country should learn whether the Cabinet has decided to take another leap in the dark, by bringing forward legislation to give

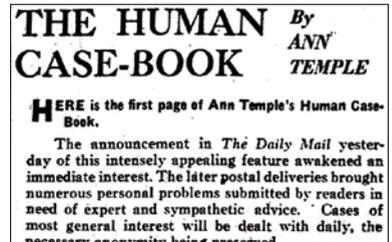
11 女性参政権の最低年齢を 30 歳から 21 歳に引き下げる法案が提出されると、フラッパー（現代風の若い女性を指す当時の流行語）に参政権など不要と反対の論陣を張った。(March 31, 1927)

1929-2004

- ◆ 1933 ヒトラー、ドイツ首相に就任 — 1
- ◆ 1936 アン・テンブルのお悩み相談コラム始まる (DM) — 2
- ◆ 1939 第二次大戦勃発
- ◆ 1945 第二次大戦終結
- ◆ 1946 創刊 50 周年 (DM) — 3
- ◆ 1967 ザ・ビートルズの『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』発売 — 4
- ◆ 1968 女性向け特集欄 "Femal" 始まる (DM) — 5
- ◆ 1970 マーガレット・サッチャー、ヒース内閣の教育科学大臣に就任 — 6
- ◆ 1975 サッチャー、保守党党首に就任 — 7
- ◆ 1979 サッチャー、首相に就任 — 8
- ◆ 1997 ダイアナ死去 — 9



1 政権獲得前からナチスを好意的に報道していた『デイリー・メール』はナチスが政権を獲得し、ドイツが国際連盟から脱退した直後に、ヒトラーへの独占インタビューを行なった。(October 19, 1933)



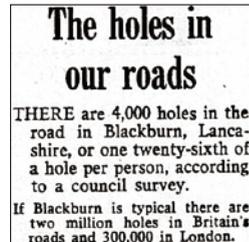
2 一世を風靡したテンブルのコラム。個人ではなく結婚や家族を重視するテンブルの道徳観は保守的な『デイリー・メール』の読者の人気を博し、コラムは 20 年間に亘り続けられた。(February 7, 1936)



3 創刊 50 周年式典ではチャーチルが主賓として招待された。記事はチャーチルの乾杯の挨拶全文と国王のメッセージを掲載している。(May 4, 1946)



4 左はギネス社の御曹司タラ・ブラウンが交通事故で亡くなったことを伝える記事 (December 19, 1966)。右は地方都市ブラックバーンの道路に関する何の変哲もない記事 (January 17, 1967)。関連性のない 2 つの記事から『サージェント・ペパーズ』の名曲「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」が生まれたとされるが、詳しいことは分からない。あるいは、後者の記事と同じ日のタラの遺児の記事の方が関係しているのかも知れない。はっきりしているのは、ジョン・レノンが当時『デイリー・メール』を読んでいて、そしてタラ・ブラウンの友人だったということである。



5 新設された女性向け特集欄。この後、編集長に就任したデイヴィッド・イングリッシュの下、創刊の原点に戻り、女性読者をターゲットにした紙面作りを鮮明にする。(October 11, 1968)



6 教育科学大臣時代のサッチャーのインタビュー記事。教育関係予算を削減し批判が多かったが、『デイリー・メール』はサッチャーの政策と人となりを詳しく紹介した。(February 8, 1972)



7 『デイリー・メール』は党首選でのサッチャー勝利を予想した唯一の新聞であった。(February 12, 1975)



8 サッチャーの首相就任は教育科学大臣時代からサッチャーを支持してきた『デイリー・メール』の勝利でもあった。(May 4, 1979)



9 ダイアナの死の翌日の号の表紙。(September 1, 1997)



トップページ



詳細検索（検索範囲の指定、掛け合わせ検索、ファジー検索）
発行時期・記事の種類等での検索範囲の絞り込み



記事表示画面（ページ単位でも記事単位でも表示可能）



一字一句をフルテキスト検索、検索語はハイライト表示



専門家による解説



発行日を選び閲覧することも可能



データベースの概要

- ◆ **年代:** 1896年 - 2004年
- ◆ **ページ数、記事数:** 約 120万ページ、約 670万記事
- ◆ **解説:**
 - ・「年表で見る『デイリー・メール』の歴史における主要な出来事」
 - ・『『デイリー・メール』の物語』（ポール・ハリス、『デイリー・メール』報道特集記事担当記者）
 - ・「『第一次大戦を予言した新聞』『デイリー・メール』と第一次大戦」「女性の王国：『デイリー・メール』と女性読者」「元祖新聞王：ノースクリフ卿の役割と遺産」「ミドル・イングランド」の声?：『デイリー・メール』と公共生活」（エイドリアン・ビンガム、シェフィールド大学歴史学科上級専任講師）
 - ・「理想の住まい」（イアン・ブラウン、『デイリー・メール』記者）
 - ・『『デイリー・メール』大西洋版』『Daily Mail Historical Archive』制作秘話」（セス・ケイリー、セングージラーニング株式会社出版担当責任者）
- ◆ **機能:** ページ送り、画面拡大・縮小、全画面表示のビュー機能の他、印刷、PDFファイルのダウンロード、書誌自動生成、書誌情報のエクスポート、メール送信、ブックマーク機能を実装。さらに、Galeの統合検索プラットフォーム Gale Primary Sources では、追加コストなしで、購入済みの Gale の買切りデータベースとの横断検索に加え、記事の OCR テキストをダウンロードすることができます。